

**SUNSHINE ENGLISH COURSE**

# My Project を活用した指導例

●目 次●

バックワードデザインで構築する脱・短期集中型の学び — <i>Sunshine English Course</i> の My Project を使って—	……………	田村 岳充	1
生徒の卒業時の姿を意識した授業・集団づくり —日々の実践から Special Project 「卒業に向けて」へ—	……………	松田 由紀子	10
自律的学習者を育てる指導 —Special Project 「卒業に向けて」を活用する—	……………	奥山 エリ子	14

## はじめに

開隆堂の教科書『サンシャイン』の大きな特長の1つは My Project です。

My Project の効用は、

1. それまでの学習の積み重ねの結果、「こういうことが英語でできる」という実感を生徒に与えることができる。
2. 学期の初めに「こういうことができるようになるよ」というパフォーマンスのモデルをあらかじめ与えておくことで、生徒と先生が My Project の時間までに何をしなければならないかという長期の目標を共有できる。
3. 日々の学習や言語活動が何につながっているかがわかるので、学習の目標が明確になり、学習への動機づけが図れる。

このようなすぐれた点をもつ My Project を各学校において生徒の実態を考慮しながらご活用いただくことで、生徒の英語力、特に表現力が大いに伸びると期待されます。My Project を活用した授業の工夫で、生徒の英語力を引き出すための活発な言語活動が展開していただけるものと思います。

先生方の中には、My Project の扱い方にご苦勞されている方もいらっしゃるかと聞いております。本企画では各学校で行われている My Project の活用法をご紹介しますので、先生方の今後のご指導のご参考にしていただければ幸いです。

開隆堂編集部

# バックワードデザインで構築する脱・短期集中型の学び

—Sunshine English Course の My Project を使って—

宇都宮大学教育学部附属中学校教諭

田村 岳充

## 1. はじめに… 英語は実技・技能教科である

英語は、国社数理とともに括られ、5教科と呼ばれます。しかし、筆者は、英語はむしろ音美保技と同じグループに入る、実技・技能教科の一つだと考えています。なぜなら、英語の授業では、語彙や文法事項などの知識だけでなく、英語らしい発音やジェスチャー、スピーチの技法などの技能を加え、それらを活用し、コミュニケーションの中で使えるようにすることが大きなゴールとなっているからです。

## 2. 部活動の指導に絡めて考える

中学校の英語教師は、部活動の顧問でもあります。英語の指導について、バスケットボール部の指導に絡めて考えてみましょう。たとえば、「県大会ベスト4に入る」というゴールを顧問・部員で共有したら、どのように引退までの強化スケジュールを考えるでしょうか。総体・県大会のトーナメントシード獲得を考えると、3年の春の大会で県ベスト8まで進むこと、そして、2年の新人戦で県大会への確実な出場と2回戦進出までを果たしておくことが必要になります。大会間には、意図的に練習試合を組み、実戦経験を積みせなければなりません。スポーツですから相手があり、100%のプレーはできるはずありません。練習試合での失敗を許容し、その経験を生かして課題を克服できるような日常の練習を行っていくことが大切でしょう。このように、ゴールから逆算して必要なステップを考えていく（引退までの時間は有限なので、削ることも大切）バックワードデザインが、成功のためのポイントではないでしょうか。

実戦の中でそれぞれの部員が壁にぶつかり、課題意識を強くもつからこそ、日々の練習での意識も高まります。体力不足で走り負ければ、つらくても長時間走るトレーニングに意欲的に取り組むでしょう。ディフェンスで相手に振り切られれば、しんどいフットワークもくり返し行うでしょう。しかし、フットワークがしっかりできるまで、体力が向上するまで、シュートが入るようになるまでは試合をしないで基礎・基本の練習ばかりさせられたら、部員は意欲的に練習に取り組めるでしょうか。

もちろん、顧問と部員との信頼関係、絆も大切です。ミスを指摘して修正だけを求め続けてしまえば、その部員は失敗を恐れ萎縮してしまうでしょう。ミスをして励まし、成長を認めてこそ、部員はのびのびとプレーできるのではないのでしょうか。一方で、必要な場面を見逃さず、部員のやる気を高める形で具体的なアドバイスを与えることも不可欠です。「なんで〇〇できないんだ！」は禁句です。

## 3. 英語の授業に置き換えてもう一度考えてみる

では、日々の英語の授業に置き換えて考えてみましょう。部活動の指導ではできていることも、なぜか英語の授業になるとできていない、ということはないのでしょうか。スピーチや英作文など、部活動の公式戦のような活動を年間のゴールとして設定せず、目の前の授業をどうしようか、という状況はありませんか。英語学習の最終目的が知識を身につけることとなり、いったい生徒は何のために英語を学んでいるのか生徒が明確なイメージをもたずに指導をしがちです。そして、口癖は「あれだけ教えたのに、なんで〇〇できないんだ！」になっていませんか。

そうしたゴールを生徒が理解しないまま、単語や文法の知識を習得させるための機械的な反復練習ばかりさせる授業を行っていないでしょうか。こうした課題を克服する鍵が、教科書 *Sunshine English Course* (以下、*Sunshine*) とその My Project にあります。

#### 4. 1年 My Project 3 「どんどん質問してみよう」を成功に導こう

ではここから、具体的に、*Sunshine 1* の My Project 3 を成功させるためのポイントについて考えていきましょう。

##### (1) My Project 3 で目指すことは何かを考える

1年 *Teacher's Manual* 『解説編』によれば、「1年間の英語学習の成否は疑問文とその答え方をマスターしているかいないかにかかっていると言っても過言ではない。」とあります。もちろんそれも大切ですが、筆者は少し違った角度から「相手に質問をすること」をとらえています。

##### ①そもそも、私たちはなぜ「質問をする」のかを考える

新聞記者やインタビュアーでなければ、唐突に相手に質問を投げかけることはあまりありません。相手を尋問したり、問いただしたりすることはあるかもしれませんが（英語の時間では避けたいですね）、対話の中で相手が話したことを聞き、自分が興味・関心をひかれ、もっと知りたいと思ったときや、相手の言っていることがよくわからないときや、その内容を確認したいときなどに初めて質問をする必要が生まれるのではないのでしょうか。

##### ②話し手・聞き手が相互に相手の存在を意識できる場づくりをする

話し手が自己紹介などのスピーチをする際、安心して話せる環境をつくるためには、聞き手の生み出す空気・雰囲気大切です。聞き手として望まれる聞き方、態度についても生徒に伝えていくことが必要でしょう。話し手に関心をもって耳を傾け、話の内容を理解しようと努めることができ初めて、興味・関心をもったことに対して気軽にたずねたり、内容確認のための質問をしたりすることができるようになります。また、聞き手が質問をすると、話し手はそれに答えることとなり、結果として対話が継続していきます。生徒に、「どんなふう聞いてもらったら、話し手として話しやすいか」と投げかけてみるのも一つの方法です。話し手の育成と同じくらい、能動的に耳を傾け、質問を投げかけることができる聞き手を育てることが大事であることがわかります。

##### ③My Project 3 のねらいを再設定する

①、②で考えてきたように、My Project 3 のねらいを、単に「疑問文とその答え方をマスターすること」ととらえるのではなく、「相手の話を聞いて、その内容を理解するとともに、自分がもっと知りたいと興味をひかれることについてさらに情報を引き出したり、わかりにくいことを確認したりするために質問をすることができる」「質問されたことについて、適切に応答できる」ようにするととらえ直してみましよう。

##### (2) バックワードデザインで考える

各学校の年間指導計画にもよりますが、My Project 3 を扱うのは年明けの3学期、もしくは年度末に近

づいた時期になるでしょう。3で考えたように、バックワードデザインで年間の指導の流れを考える必要があります。聞き手が質問をし、話し手がそれに応答し、対話を継続することができるようにするために、日頃から対話の場を継続的に設定することが必要です。My Project 3では、p.113からp.115にかけて、かなり多くの質問が取り上げられています。この単元に入ってからまとめて練習をさせ、使わせようとするのでは大変です。教える側の教師も、短期集中で教え込まなければならないことになり、これだけの数の質問を急に使いこなさなければならない生徒も、覚えきれずに終わり、双方が苦しくなるだけです。たとえ疑問文を使い、その質問に答えられたとしても、教科書のページをずっと見ながら、相手の顔を見ることなく質問を読み上げるようになってしまったら、My Project 3のねらいを達成できたとは言えません。

年度当初からMy Project 3の単元に入る前までの間に、生徒ができるだけたくさんの質問に触れ、使う経験を積むと同時に、それらに応答する機会をできるかぎり増やしていきましょう。下の<図 1>を見てみましょう（2学期制の学校では時期を見ながら柔軟に読み取っていただけると助かります）。



<図 1> My Project 3 をゴールとしてバックワードで考える年間の指導イメージ

### ①帯活動

帯活動とはおもに、毎時間の授業の冒頭部分の短い時間に位置づけられ、継続して行われる活動を指します。今回紹介するのは、ペアでの対話活動です。

#### 【Please tell me.】

隣の席に座っているパートナー（場合によっては前後のペアも可、本校では交互にパートナーを換えて

行っている)とペアを組んでフリーに対話をします。一人が相手に向かって、Please tell me....と話しかけ、問いかけられた生徒がそれに答えて対話を続けます。

Teacher Talk をとおして、その日のトピックを提示します。その際、ただ単にトピックを提示するのではなく、教師が自分についての情報を自己開示しながら話すことで、生徒の関心をひきつけることができるとともに、それがモデルとしてのインプットとなり、生徒相互の対話に生かされることとなります。下に、Teacher Talk の一例を示します。

Do you like sports? Yes? What's your favorite sport? Baseball? Soccer? Tennis? OK, then, do you know my favorite sport?

It's a ball game. We play it in the gym. Ten players play it together. One team needs five members. What is it? Oh, yes! It's basketball! Basketball is my favorite sport. I love it!

As you see, today's topic is your favorite sport. Ask your partner, "Please tell me your favorite sport."

このようにしてトピックを提示し、ペアで対話をさせます。1 学期は、英文を駆使しての対話はなかなか成立しません。したがって、単語やフレーズレベルでの対話でも構いませんし、ジェスチャーでなんとか伝えても構いません。誤りも許容し、対話が継続することを第一に行かせます。

対話の継続時間は徐々に延ばしていけるようにします。当初の設定時間をどのくらいにするかも各学校の生徒の実態に応じて決めればよいと思います。ただし、My Project 3 でインタビュー活動をどのくらいの時間でさせるのか、各学校で設定したものがあれば、最終的にそこにたどりつけるようなロードマップを考えておく必要はあります。

対話中、教師は机間指導をし、ほかの生徒のモデルとなるペアを抽出しておきます。対話が終わった後で、モデルとなるペアに対話の内容を再現してもらい、どんなところがよかったか生徒と話し合ったり、教師が具体的に賞賛したりして、次の対話の際に生かせる具体的なポイントを学ばせるようにします。

### 【Any news?】

Please tell me. と基本的な流れは一緒です。違っているのは、Please tell me. が教師によるトピック指定がある対話なのに対して、Any news? は、トピック指定がなく、自由に対話を発展させていくものです。考えてみれば、日常会話は、何か話す価値のある大きな話題について話すよりも、何気ないことについて話すことのほうがむしろ多いのではないのでしょうか。1 年生の当初は、教師からトピックを与える Please tell me. を中心に行かせますが、1 年生の後半になったら、Any news? の機会を増やすようにします。1 年生ですから、対話と言っても単語レベルで、ジェスチャーを駆使しながら話をするところから始まります。なんとかして対話を継続しようとする経験を積み重ね、対話の発展のさせ方を体験的に学びます。

右に示した例のようなペアの対話を、1 分間を目標に継続させます。対話の継続とともに、伝えたい内容を重視します。正確に対話することを強く意識してしまう

S1: Hi! Any news?

S2: Nothing special, but I ... TV last night.

S1: Last night? ※下線部を指導しておく。

S2: Yes. What? What program?

S1: Drama.

S2: Oh, drama. What drama?

S1: *Kayo Suspense.*

S2: Oh, really? ※S1, S2 は生徒を表す。

と、楽しんで対話ができなくなります。また、不要な間ばかりが長く続くようになってしまいます。

ゴールである My Project 3 を意識し、年度末の段階で、聞き手が能動的に質問をし、対話を継続することができるようになればよい、と肩の力を入れすぎないようにしたいものです。

対話の経験を積み重ねていく中で、「こうすれば対話が継続する」というポイントについて、タイムリーに生徒と共有していきます。あいづちやリアクションなども、生徒が対話の継続に困っている様子が見えたところを見計らい、彼らの問題意識が高まったときに導入していきます。

## ②教師とのインタラクション

聞き手が能動的に質問をする、ということは意外に高いハードルかもしれません。疑問詞を知識として教え、問題演習で定着させたらできるようになる、というものではありません。実際に教師がやってみせることで、生徒はどんなときに、どんな質問をすればよいのか、ということを経験的につかんでいきます。

まさに、「習うより慣れよ」です。教師と生徒とのインタラクションを行う場面は、授業開始後や新しい言語材料の導入部分など、授業の中でたくさんあります。

たとえば右の例は、どんな漫画が好きか、ということを経験的にした教師と生徒のインタラクションの一部を示しています。太字下線で示した教師の反応は、生徒の発話を受けて、Reaction, Repetition, Question のような流れとなっており、対話を継続するために必要な流れを示す例となっています。

①、②で示した日常的・継続的な指導が次第に生徒に質問をする力、そして対話を継続する力をつけていくのです。

なお、<図 1>の③コミュニケーション活動についてここでは詳述しませんが、導入部分で教師と生徒がインタラクションをしながら対話の例を示すことで、先に紹介したような能動的な聞き手を育てることにつながるよい機会となっています。

T: S3, do you like comics?

S3: Yes.

T: **Oh, you like comics. What comics do you like?**

S3: One Piece.

T: **I see. I like it too. Why do you like it?**

S3: Exciting!

T: **You mean you like it because the story is exciting.**

S3: Yes. The story is very exciting.

T: **What character do you like?**

S3: I like Zoro.

T: **You like Zoro! He is so cool.**

※T は教師，S3 は生徒を表す。

## ③評価と評価場面

総括的な評価の場面として、各学期末に行う My Project や、ペアでの対話テストなどを位置づけます。どんなことがどの程度できるようになればよいか、評価規準・基準については生徒の実態をふまえ、各学校で設定することになります。

年度末の My Project 3 に向けてバックワードで年間指導計画を考えると、ゴールに向けてのリハーサルの活動が必要になります。パフォーマンステストの機会を頻りに設定するのは物理的に難しいので、Sunshine が提案しているように、各学期末に位置づけ、その学期に学んだことがどのくらい身についているのかを生徒自身が振り返りながら、教師も生徒の達成度を確認できる機会とするのです。また、ゴールと同様の活動を位置づけておくことで、現時点でできるようになったことと、課題となっていることが確認でき、その後の学習に生かせるようになります。指導と評価の一体化の面からも、教師自身がこれまで

の指導をふり返り、次回以降の指導で何が必要になるのかをつかむ大切な機会になります。My Project や対話テストが終わったら、モデルになるパフォーマンスを全体で視聴し、なぜよいのか、どんなところが参考になるかを話し合い、共有する時間を設けることも大切です。うまくいかなかった場合など、課題を抱えている生徒にとっては、その時間が大きな助けになります。デジタルビデオカメラやタブレット端末を使えば、生徒のパフォーマンスの動画撮影・管理も簡単です。ぜひ録画に挑戦してみてください。映像を見せることで、生徒の反応が変わります。

このように、1年間の指導を見とおしながら日々の授業を展開していくと、より効果的な授業が行えるようになるでしょう。

## 5. My Project 3 「どんどん質問してみよう」の具体的な指導展開を考えよう

それではここから、My Project 3 の具体的な指導展開を考えていきましょう。1年 *Teacher's Manual* 『解説編』(p.213) で提示されている計画を左に、そして、今回提案したい指導計画を右に提示します。

時	1年 <i>Teacher's Manual</i> 『解説編』の指導計画	筆者の提案する指導計画
第1時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 p.112 の自己紹介例をもとに、どんな質問ができるか考えさせる。</li> <li>2 「相手への質問例」の下線部を補わせ、クラス全体で確認し、それぞれの文を教師のあとについて言わせる。</li> <li>3 これまでに習った疑問文とその答え方を p.113 の一覧をもとにふり返り、言えなかった文については言えるように練習させる。</li> <li>4 ペアになり、一方が p.113 の疑問文を5つ選んで相手に問いかけ、他方がそれに答える。次に、役割を交代して行い、制限時間までこれをくり返す。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 教科書を閉本し、名前を明かさないうまま、教師が<u>ある人の自己紹介の英文を読み上げる</u>。どんな内容だったかを考えながら数回聞かせ、ペアになって共有して発表させ、全体でシェアする。</li> <li>2 1 で紹介した自己紹介文をスクリーンに提示し（プリント配付でもよい）、1 で聞き取れたこと、聞き取れなかったことを確認させる。</li> <li>3 <u>自己紹介文の主が誰なのかを当てるために、知りたいことを質問にして教師にたずねる</u>。質問は個人で考えたあと、ペアや小グループで検討する機会を設け、安心感をもってたずねさせるようにする。</li> <li>4 自己紹介文の主が誰かがわかったあと、p.112 の「相手への質問例」の下線部を補わせ、答え合わせをすることで、<u>3 で適切な質問ができたかをふり返らせる</u>。</li> <li>5 左の3, 4 を行う。</li> </ol>

第2時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 p.114 のクイック Q&amp;A パート 1 のやり方を説明し、p.114 の 1～4 の疑問文を使って 10 分かけて行う。</li> <li>2 上と同じことを p.115 の 5～9 の疑問文を使って 10 分間行う。</li> <li>3 p.114 のクイック Q&amp;A パート 2 のやり方を説明し、1～9 の全ての疑問文を対象に 20 分間行う。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 左の 1, 2 を行う。ただし、隣の席の生徒をパートナーにする 1 回目、前後の席の生徒をパートナーにする 2 回目の 2 回で終える。</li> <li>2 左の 3 を行う。ただし、1 と同様、隣、前後のパートナーと 2 回のみで終える。 ※<u>基本的な質問には、年間をとおして慣れ親しみ、習熟してきているため、くり返し行うことで意欲が失われることを避ける。実際には生徒の実態に応じて回数などを決める。</u></li> <li>3 p.116 のミッションについて、1 にしたがってやり方を説明する。</li> <li>4 p.117 のカードの内容について練習する。それぞれの人物の名前、職業、年齢、住所などの発音の仕方を教師のあとについて練習する。</li> <li>5 ミッションを行う。</li> <li>6 <i>Sunshine</i> 巻末付録の「英語で『できるようになったこと』リスト」を用いて自己評価を行う。</li> </ol>
第3時	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 pp.114-115 の疑問文を使って復習を行う。クイック Q&amp;A パート 2 にしたがって 10 分間行う。</li> <li>2 p.116 のミッションについて、1 にしたがってやり方を説明する。</li> <li>3 p.117 のカードの内容を練習する。それぞれの人物の名前、職業、年齢、住所などの発音の仕方を教師のあとについて練習する。</li> <li>4 ミッションを行う。</li> <li>5 <i>Sunshine</i> 巻末付録の「英語で『できるようになったこと』リスト」を用いて自己評価を行う。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 p.116 の 1 で示された項目をアレンジした表（好きなもの・食べ物・歌手・アニメなどの項目や、できることなど）を準備する（答は未記入）。<u>学年の他の教師などの写真をあらかじめ準備しておき、その人にインタビューをするという設定で、ここまで学んできたことを生かして質問を考え、たずねる（教師が本人の代わりに答える）。</u></li> <li>2 1 で提示した表に、<u>生徒自身の答えを記入させる。答えの記入が終わったら、隣の席の生徒を相手にして、インタビュー形式で自由に対話させる。目安となる時間を提示し、その時間まで対話を継続できることを目標にさせる。</u>インタビューが終わったら、役割を交代して再度行う。教師は机間指導しながら対話を継続できているペアを選んでおき、<u>モデルとなるペアに対話をデモンストレーションさせ、どこがよかったのか、全体で話し合う時間を設ける。</u></li> <li>3 2 で気づいたことを生かし、<u>今度は教科書を閉本して、前後のペアで再度インタビューを行う。</u></li> <li>4 左の 5 を行う。</li> </ol>

※\_\_\_\_\_（下線）…指導の工夫

## (1)指導の工夫について考える

授業で取り組む活動に対して、生徒が興味・関心を持ち、意欲を高めるためには、その活動や取り上げられている話題に、自己関連性や必要感、必然性があるかどうか、また、適度な自由度があるかどうかポイントになります。My Project 3 の①で示された自己紹介文は、生徒にとっては突然提示されたものであり、架空の人物のものであるため、自己関連性や必然性があまり感じられません。そこで第1時では、生徒たちとの関連がある人物（学年のほかの教師、ALT、地元出身の有名人など）を取り上げ、その人が実際に（名前を除いた）自己紹介をしているような状況を作ることで、生徒の興味・関心をひきつけ、意欲を高めましょう。また、最初から質問例を提示するのではなく、生徒自身に質問を考えさせる時間を与え、実際に質問する体験をさせることも大切です。当然、たずねたいことが質問にできないもどかしさを感じるようになりますが、どんな疑問文をつくれればよいか知りたい、という気持ちが高まっているので、質問例を提示されたときの吸収力が強くなるのです。転ばぬ先の杖で、先回りして手取り足取りに指導しすぎないことも大切なポイントです。

第2時のところでもふれたように、年間をとおして質問をすること、対話を継続することに取り組んできているので、ここで練習させる回数を多くしすぎてしまうことで、かえって生徒の意欲を低下させてしまうことも考えられます。パートナーを替えながら2回程度練習して、さっそくインタビューをさせてよいでしょう。もちろん、実際の回数は、生徒の実態に応じて決めることが大切です。

その後、教科書 p.116 のミッションに挑戦させ、疑問文を使いこなせるか、質問された内容に適切に答えられるか、自分の現在の学習状況（理解度・運用のための習熟度）を確認させてみましょう。

第3時では、そこまでの2時間の学びを生かして、実際に友人に自由にインタビューできることを最終ゴールとします。第1時同様、自分たちに関係がある人物になりきった教師に、与えられたインタビュー項目について質問を投げかけ、答えを引き出させるようにします。知っている人の答えとしてどんなものが返ってくるのか、生徒たちは楽しみながらインタビューをするでしょう。この段階が前時までの復習となっており、本時のゴールに向けたウォーミングアップの活動にもなっています。

次に、ペアの相手にインタビューをする活動に移ります。この活動が、1年間の学びの集大成になります。まずは実際にやってみる機会を与えましょう。

1セッションが終わったら、モデルとなるペアにデモンストレーションをさせ、学ぶべきよい点について全体で共有する時間を設けましょう。生徒は、教師がポイントを説明してしまうよりも、仲間どうしのデモンストレーションのほうが何倍も興味・関心をもって見聞きし、学ぼうとします。そこで気づいたことを生かして、再度パートナーを替えて挑戦できるようにします。冒頭で部活動指導と英語の授業での指導について絡めて考えてみたように、Try it. Fail it. Try it again. Fail it better.ということをお我々教師が念頭において、生徒の学びを見つめる必要があります。1年間の総仕上げだから、すべて正確に、という落とし穴に陥りそうですが、2年、3年での学びが続くのですから、まずは私たち教師が肩の力を抜き、生徒の誤りに厳格になりすぎず、寛容でいられるようになりたいものです。このような教師の姿勢が柔らかい雰囲気醸成を促し、生徒の積極性を引き出すことにつながっていきます。さらに質問させたい項目を事前にイメージし、p.116のミッションの項目に加えておきましょう。

## (2)生徒の目線で活動を見直す

p.116 で示されたミッションの全ての活動が終わったら、My Project 3 は生徒にとって魅力的なものとなるでしょうか。生徒の目線で見つめてみるとどうでしょうか。

生徒たちは、自分の考えや気持ちを表現したいと願っています。仲間や教師、ALT など、自分と関わりのある人にインタビューをし、自分の知らない新しい情報が引き出せたときに、質問をしてよかった、相手を理解できてうれしかった、と感じるのではないのでしょうか。教科書の素材を少しだけアレンジし、進め方の工夫を加えることで、生徒の意欲が高まります。生徒の願い、思い、気持ちに寄り添った授業構想を心がけたいものです。

## 6. おわりに… My Project 3 を年間のゴールに据え、ゴールに向かって進もう

最後に、もう一度伝えたいことがあります。それは、ゴールに向かってバックワードで年間の指導を見とおすことの大切さです。My Project 3 で生徒が生き生きと活動することができるようするためには、そこで必要なことを年間の指導の中に散りばめ、日常的・継続的に取り組むことができるようにしておくことが大切です。

筆者の実践では、My Project を意識した結果、1年間を通して行う活動が定まり、授業そのものがとてもシンプルになりました。帯活動などがそのよい例です。活動は変わりません。変わらないので生徒も安心して学び、ゴールを意識することができます。しかし、話題は毎回変わるので、飽きることはありません。みなさんも、ぜひ実践してみてください。

# 生徒の卒業時の姿を意識した授業・集団づくり

—日々の実践から Special Project「卒業に向けて」へ—

福岡市立原北中学校教諭

松田 由紀子

## 1. 中学校生活の最後に「心を揺さぶる活動」を仕組み、心の琴線に触れる授業をしよう

卒業間近の風物詩と言えば、学級での卒業文集づくりである。しかし、その内容は以前とは様変わりしつつある。最近では、自分の思いを文章にまとめるというよりも、「いちばん好きだった先生」「誰がいちばんに結婚する」などのアンケート結果や一言メッセージをまとめたものが多いようだ。思い出づくりとしてはおもしろいだろうが、英語学習のまとめとして、自分の思いをまとめた文章で綴らせるという取り組みは、3年生の最後だからこそ取り組めるもの、かつ生徒の心に深く残るものにしたい。

## 2. 生徒が心の奥底にあることを発信できるような集団づくりをしよう

開隆堂 *Sunshine English Course* には、左ページに Let's Try がある。この部分をカットされている先生が多いようだが、なんとももったいない話である。言語習得のプロセスは、Listening-Speaking（実際に口に出すこと）の量が十分に確保されて初めて確かな Writing につなげることができると言われている。用意したプリントによるドリル学習だけでは「機械的な input」で終わっており、場面を想定した Speaking（音読を含む）の活動が行われなければ intake（有意味学習）にまで高めることはできない。この Let's Try は新出文型の定着を図るのに非常に有効な自己表現活動である。この Let's Try で、生徒の考え方や思わぬ一面を知ることもある。私のクラスの A 子さんのことを紹介させていただきたい。

彼女は小学校高学年と中学校1年のときに、ひどいいじめにあい、1年の終わりまで学校を欠席することがほとんどだった。2年になって、クラスメート全員の温かいサポートで、11月からはまったく学校を休まなくなった。*Sunshine English Course 2 Program 10-1* の Let's Try に取り組んでいたときのことである。彼女が友人とペアでつくった英文を発表した。

A: What is the most important thing to you, your friends, your family, or time?

B: My friends are more important than my family. My friends are the most important to me.

生徒全員が一斉にはっとした表情で私のほうを見た。目頭が熱くなるのを感じながら、私はやっとうこう言った。「A 子さん、このクラスで楽しくやっていますよね。」全員が深く頷いた。彼女が日本語で自分の気持ちを言ったとしたら、ここまで皆の心を打たなかったと思う。そして、おそらく日本語だったら言えなかっただろう。英語という違うフィルターを通して、自分の本当の気持ちを伝えようとした彼女を見て、つくづく英語を教えることの大切さを感じることができた。

## 3. 「書くこと」に対する抵抗感をなくそう

4 技能の中で、生徒がいちばん苦手意識をもっているのは「書く活動」のようである。あるクラスでは、苦手

意識をもつ生徒の数が 60%にものぼった。自分の考えを、構成に気をつけながらまとめた英文で書くことは難しい。まして、自分の考えさえもてない生徒にとっては苦痛な時間となりやすい。

昨年、文部科学省の中央研修で“Pass the Parcel”という英作文の活動を習った。1つの質問に対する答えを4人でプリントを回しながら仕上げるものである。1枚のプリントには5つ程度の質問がある。

(例) 質問 → Which is more interesting to you, reading or playing sports?

1人目 → \_\_\_\_\_ (答えの文)

2人目 → This is because \_\_\_\_\_

3人目 → \_\_\_\_\_ (追加情報となる文)

さっそく授業でも試してみた。活動のあと、多くの生徒たちが「今日の書く活動、すごく楽しかったです」「先生、またやってください」と私に言ってきた。私は「実は今日やったことは、そのまま高校入試の最後の英作文につながっています。入試の英作文は、25～30語で、今日みんなが書いた英文の量と同じくらいです。つながりを考えるから構成もきちんとできるようになります」と説明すると、一斉に「おお～！」という歓声が上がった。

さらに『ヒューマンな英語授業がしたい！—かかわる、つながるコミュニケーションをデザインする』（三浦・池岡・中嶋、2006）で紹介されている「チェーン・レター（紙上ディベート）」にも取り組ませてみた。各クラスには英語を書くのが苦手な生徒が数名いるが、友人たちの助けを借りながら、頑張っ て英文をつないでいくことができた。成績上位の生徒の感想には「意見の言い合いは、いろんなことがわかっておもしろい」「書いていてわくわくした。ぜひまたやりたい」と書かれていた。一方、成績が中位以下の生徒たちも「1年生のころと比べたら、ものすごく成長したなと思った。意見のやりとりをするのは楽しかった」と書いていた。教師の工夫次第で、書くことに「関わり」をつくってやると、苦手なはずの書く活動にも積極的に取り組むようになるのだということを知った。こうして、自己表現活動をとおして協働学習を推進することが人格形成につながるのだと考えるようになった。

#### 4. 「卒業文集づくり」に取り組んでみよう

2でも紹介したが、英語学習では、ふだん言えないことや日本語ではなかなか言えないことも表現できる。そこで、生徒の興味・関心や知的好奇心に即した「書きたくなる内容」を仕組んでいくことで、学習に意欲的に取り組むようになる。また、書く量が増えれば、量質転化の法則どおり「書く力」も高まっていく。

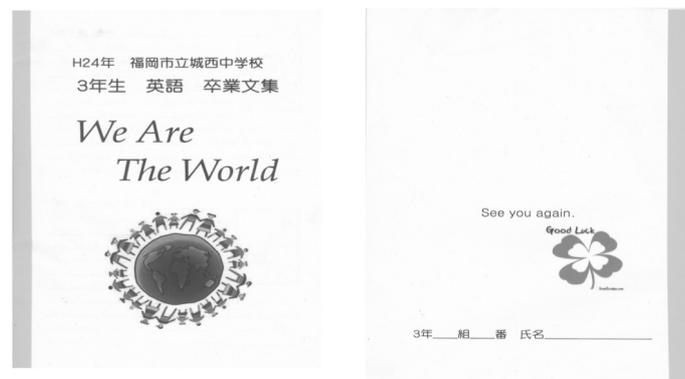
このような力を日常的につけていくことで、卒業前に、集大成として「英語の文集づくり」に取り組むことができる。卒業文集づくりに取り組めない理由は、概ね次のようなものである。

- 高校入試前にそんな余裕はない。
- 文集にできるほどの英文など簡単には書けない。
- 時間がかかりそうで、面倒くさい。
- 教師が、卒業文集に取り組むという発想をもっていない。

果たして本当に時間がないのだろうか。また、中学校の英語学習のゴールは「高校入試対策」なのだろうか。書く力が十分に育っていれば、入試にも英検などの外部試験にも対応できるはずである。

日本語も英語も「ことば」である。ことばは、使えるようにならなければ学ぶ意味はない。この命題に対して、今まで果敢に挑戦されてきた先生がたくさんおられる。中嶋洋一先生（現・関西外国語大学教授）はハードカバーの卒業文集に10年間取り組まれた。3年を担当されない年度は、他の同僚が文集をつくられたと言う。学校全体のProjectなのである。はじめてその文集を拝見したとき、ずっしりと重い装丁だけでなく、生き生きと英語で語る生徒たちの珠玉の詩、エッセイ、ディベートなどの質の高さ、生徒たちのみずみずしい感受性に圧倒された。『15: 中学生の英詩が教えてくれること—かつて15歳だった全ての大人たちへ』（中嶋ほか, 2006）では、中学生たちの書いた英詩を幸若晴子さんという詩人が和訳されている。英詩が、詩人の訳（味付け）によって、また違った芳香を醸し出している。生徒に真の英語力をつけるとは、このような活動を言うのではないだろうか。

生徒の卒業を間近にした気持ちや思いを、英語を通して「記録」に残すような取り組みは実は全国でも見られる。ここでは、福岡市立城西中学校教諭、吉野かおる先生の卒業文集の取り組みを紹介したい。



吉野先生が卒業文集をつくろうと思った理由は次の2点である。

- 3年間の集大成として何かを残してやりたい。
- 生徒がspeechしたことを、文字でも確認できるようにしたい。

吉野先生は、*Sunshine English Course* の My Project や生徒の成長に合わせながら、下記の内容で学期に一度、まとまった「自己表現活動」に取り組まれている。卒業文集は、最後の「自己PR」をイラストつきでまとめたものである。これは、吉野先生の英語教育のゴールである。

	1 学 期	2 学 期	3 学 期
1年	自己紹介①	友人紹介	My Hobby / 私の1日
2年	自己紹介② (①を深化させて)	自分の住んでいる町紹介	私の夢
3年	有名人の紹介	伝統文化の紹介	自己PR

英語文集に載せる「My Project 9 自己PRしよう」への取り組みは、次のようなプロセスである。

〈第一次〉

- 自分の夢を語るスピーチの具体例を読み、マッピングで構想を練る。
- 友だちどうして、わかりにくいところを指摘し合い、より具体的な情報を加えたものを完成させる。

〈第二次〉

- 自分のスピーチの原稿を作成する。
- 原稿を丁寧に読む練習を行い、見ないでも言えるように練習する。  
英語教師とネイティブが、生徒が安心してスピーチが言えるようになるまで指導助言を行う。

〈第三次〉

- スピーチを行う。授業の最初の15分を活用して、6人が行う。(6時間)
- 内容について、ネイティブが2つ質問をする。

## 5. 生徒の「書きたい」「書いてみたい」という気持ちを育てよう

文集づくりとは、授業で行ったこのような活動を「記録」として残し、それを卒業プレゼントにするのである。何事も記録に残して、はじめて思いが深まるものである。何年後かに自分の作品、友だちの作品を読み直すことで、懐かしさを感じるとともに、成長した自分を実感することになる。いわば、自分の本棚に保存しておく「タイム・カプセル」なのである。

3年間(小学校の外国語活動も含めると5年間)の英語学習の総まとめとして、「未来の私へのメッセージ」「お世話になった人、ものへの感謝の思い」「卒業を前に今書き残しておきたいこと」などを書くことももちろん可能であるが1年のときから書きためてきた「自己表現集(自己紹介、私の町、私の夢など)」の中から1つ選んで加筆修正をすることも可能である。下書き(原案)がすでにできていれば、読者の立場に立って、より内容を深めることも、短時間で内容を膨らませることもできる。

平成28年度版 *Sunshine English Course* では3年の最後に Special Project「卒業に向けて一思いを伝えよう」を設け、中学3年間の総仕上げとして卒業文集づくりに取り組む活動を取り入れている。この Project は、きっと3年間の最終ステージを意識した英語教師が、生徒たちを自律的学習者へと導く compass になることだろう。

### 参考文献

- 中嶋洋一・幸若晴子・大津由紀雄・柳瀬陽介・佐藤礼恵『15：中学生の英詩が教えてくれること—かつて15歳だった全ての大人たちへ』(2006)ベネッセコーポレーション
- 三浦孝・中嶋洋一・池岡慎『ヒューマンな英語授業がしたい!—かかわる、つながるコミュニケーションをデザインする』(2006)研究社

# 自律的学習者を育てる指導

## —Special Project「卒業に向けて」を活用する—

山形市立金井中学校教諭

奥山 エリ子

### 1. 生徒の感想から学ぶ

最初に、ある生徒の感想文をお読みいただきたい。

「私は1年生の頃から英作文を書くのが苦手で、かなり悩んでいました。でも、3年生の英語の授業やPower Up Notebook(自学帳)、音読などをおして少しずつ英作文が書けるようになり、気づいたら得意！って言えるぐらいになっていました。卒業スピーチでは自分の20年後について英作文を書きましたが、びっくりするくらいスラスラ書いて本当にびっくりしました。4月のときに授業計画を聞いて『スピーチなんて英作文書けないし、人の前でしゃべれないしムリ…。』と思っていましたが、英作文も書けるようになったし、人の前で堂々と話せるようになったので、もう何も怖くなかったし、むしろ楽しかったです！

ペアの〇〇ちゃんは、最初の頃は英作文が苦手みたいだったけど、卒業スピーチを書くときは、スラスラと書いていて、私もすごく嬉しくなりました！クラスみんなも英語苦手なのかな？ と思っていた人が長くてカッコいいことを言っている文章をスラスラと読んでいて、すごい!! と思いました。みんなの夢や宝物の話は、聞いていてとても楽しかったです！卒業スピーチ、英語の授業をやってよかったなと思いました。」

これは、2013年度の3年生が最後の授業で書いた授業のふり返りの一部である。このような内容の感想を書いてくれるようになるまで、試行錯誤の日々が続いた。

初任のときからさまざまなセミナーに通い、本を読み、見よう見まねで取り入れた活動は、どれも「何が足りない」と思えるものだった。スピーチ活動も、講師が動画で示された生徒たちのようにはいかなかった。やがて、以下のような原因がわかった。

- (1) 日本語で原稿を書き、それを英和辞典で調べるので聞いていてもわからない。
- (2) 英語の語順が定着していない。
- (3) 発表者の声が小さく、聞き取れない。
- (4) 英語らしい発音でないからわからない。
- (5) 聴くための心が育っていない。

付け焼刃の指導では、スピーチの成功など、ほど遠いことを思い知った。

そこで一念発起し、「できるようになった生徒の具体的な姿」を頭に思い描き、4月最初の授業で生徒と共有をしておこうと考えた。その目標に向かって、1年間かけてどんな活動をいつどのようにしてやっていくのか見通しがもてるように示そうと考えた。

人は「何のための活動か」を理解したときに、はじめてやる気になれる。やる気を促すには、原理原則があると言う。『スイッチ！—「変わらない」を変える方法』（ハース、C・ハース、D、2013）では、それを次のように紹介している。

- (1) 理性に訴えかける（何のためにやるのかがわかり、目的、到達目標、やり方がわかる）。

(2)感情をゆさぶる(「おもしろい!」「先輩ができたんだから、自分にもできそう」「自分にもできた!」「やってよかった!」)。

(3)環境を整える(具体的な方法や点検など「習慣」をつくる工夫、一緒にやる仲間がいるからできる)。さらに、ものごとを続けるためには「適切なコーチング」と「共に学び続ける仲間」が必要であるという。

そこで仮説を立ててみた。たとえば、音読指導。一つの課が終わるごとに音読テストを行う。さらに、学期末のまとめの言語活動を、期末テストの「書く」問題と実技テストと連動させ、必要感をもたせる。目の前の課題を一つひとつクリアしていく。こうすることで、いつのまにか卒業スピーチができる下地ができるのではないか。

そのためには、新年度が始まる前に、英語科部会で、到達目標(ゴール)を話し合って決めておくことが必要ではないか。たとえば、次のような内容である。

「3年生が本校を卒業するとき、人前で堂々と自分の思いを英語で発表することができる。タイトルは In 20 years または My Treasure のどちらか、書きやすいほうを選ぶ。友だちのスピーチを聴いて、それに対して英語でメッセージが書ける。」

## 2. 「育てたい生徒像」を実現するために

こうして、教科部会で話し合ったことに取り組んでみた。ゴールに到達するには2つの要素が必要である。一つは「4技能の下地づくり」であり、もう一つは「人間関係づくり」である。

### (1) 4技能の下地づくりと見通しづくり

下地づくりを丁寧に行えば、生徒の心身に英語が刷り込まれ、それを必要なときに取り出して使うようになり、やがて即興の言語活動もできるようになる。

教師が配慮することは、最初に1年間のおおまかな流れと評価内容と評価方法を伝え、その見通しを与えておくということである。高校入試問題も4月に見せておく。山形県では、500語を超える長文を一息に読み、問題に答える作業を20分以内でやらなければならない。そのためには、手間と時間が必要だ、ということを理解させる。

### (2) 温かい人間関係づくり

1学期の中間テストが終わったら、英語学習用のペアを組む。これは、中嶋洋一先生(現・関西外国語大学教授)の指導で、クラスの半分がリーダーで、半分がパートナーになる。誰とペアを組みたいかという希望をもとに、学級担任や養護教諭らと相談しながらペアリングをする。学力差があり、人間関係がつかないでいるので、ペア活動がよく機能する。しかし、基本は仲良しペアなので、学習規律ができていないと授業が崩壊する。ペアの目的を生徒にきちんと理解させておく必要がある。

ペアをうまく機能させるには、リーダーを育てることだ。そのためには、教師がペア活動の際、生徒の活動の様子を注意深く観察しておく必要がある。相手のことを考えている行動が見えたときには、全体の動きを止め、そのペアに注目させる。教師が思うA基準の行動が出たときに、間髪を入れずに全体でシェアする。価値の高い行動が紹介されると、さらによい行動をしようと試みるようになる。

また「答えを教えてはいけない」というルールも必要である。リーダーは相手がわかるように、上手な

質問をして答えまで導こうとするので、実に頭をよく使う。よって、リーダーはおもい役ではなく、ともに伸びていく。この「協働学習」とも言えるペア活動は、生徒全員に支持されている。

さて、こうして身についた4技能をさらに伸ばすためには、日常的な家庭学習が欠かせない。そこで具体的にやり方と内容を示す。まずは、教科書の音読。次は Power Up Notebook（中嶋先生の実践）1ページに英語を書くこと。自学のメニューは最初に渡しておく。

- Level 1 — 理解の段階。教科書の視写や音読筆写、要点のまとめ。
- Level 2 — 暗記の段階。暗記して、自分が覚えたかどうかテストして自己採点。
- Level 3 — 問題解きと基本文の置き換え練習。
- Level 4 — 自己表現。英文日記や自由な題で。

Power Up Notebook が1冊終了したら、最後のページに、1冊を書き終えて自分の心と体の変化を見つめて感想を書く。それを読み、教師も心を込めてメッセージを書く。

音読筆写も有効だ。授業で体験させると、生徒は「英文を音読しながら、集中してたった5回書いただけでスラスラ言えた！ 暗記しようとしたわけじゃないのに」と驚く。自分で実感したことは家でも取り組むようになる。

授業が始まる前に、Power Up Notebook を点検する。ノートを集めると大変なので、始業前にペア学習をしている間をぬって、教師がノートを点検して回る。

評価基準も示す。合格が B。教師を感動させる内容があれば A。さらに、量や完成度の高さによって A○, A◎, A の三重丸というランクがある。内容がよく、A○以上をもらった生徒のノートはコピーしてクラスでシェアする。

毎日ノートに書くのは大変だが、今日は何を書こうか考えることで自主性が育つ。人からさせられていると考えているうちはおもしろくないし、力もつかない。このように4技能の下地をつくる活動で、小さな成功体験をたくさん積み重ねることで、生徒に自信をつけると同時に、必要な英語力を体に刷り込んでいくのである。

卒業のまとめ（スピーチ原稿、プレゼンテーション原稿と様子がわかる写真、エッセイなど）は、卒業文集として製本する。せつかくの発表は記録に残してやりたい。スピーチを聴いた生徒は、発表者に向けてメッセージを書く。それが生徒たちにとって新たな宝物になる。

教師の指導で実際にスピーチができるようになると、生徒たちは素直に学習活動や言語活動を行うようになる。やがて、正しい英語の学習のしかたを学び、英語力を伸ばし、まわりの人とつながり、自己肯定感を高め、自信を深め、希望を胸に卒業していく。それを応援するのが、私たち教師の醍醐味であり、永遠の課題ではないだろうか。

## 参考文献

ハース, C・ハース, D (千葉敏生訳)『スイッチ！—「変わらない」を変える方法』(2013) 早川書房

平 28 教 指導資料 *SUNSHINE ENGLISH COURSE*

## My Project を活用した指導例

---

編 者	開隆堂編集部	非売品
発行者	開隆堂出版株式会社	
	〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1	
	電話 (03)5684-6115 (編集), (03)5684-6121 (営業)	

---